水上勉全集 15

水上勉全集

15

水上勉全集　第十五巻

昭和五十三年二月十日印刷
昭和五十三年二月二十日発行

著者　水上勉
発行者　高梨茂
印刷者　白井倉之助
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ八ノ七
電話(五六一)五九二一
振替東京二一三四
検印廃止
一九七八©

目次

兵卒の鬚　3
冬日の道　141
草民記一章　231
道の花　251
「ぼろんか騒動」の多吉　547
あとがき　579

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

兵卒の鬃

神は眼を保護するため、長い耳をロバに、長い鬃を馬に与え給うた
――クセノホーン――

一

昭和十九年五月一日の午過ぎに、召集令状を受けた。次のような文面であった。

福井県大飯郡本郷村岡田第九号二十三番地
第二国民兵役　安田万吉

右充員（補充）ノ為中部第四十三部隊ヘ召集ヲ令セラル
昭和十九年五月五日午前九時マデニ京都市伏見区深草墨染町ニ到着シ此令状ヲ持ツテ当該部隊（集合場）召集事務所ニ届出ヅベシ

福井聯隊区司令部

私の名だけがペン書きで、枠の外に馬のゴム印が捺されていた。配達してきた役場の兵事係は、中部第四十三部隊が、「輜重隊」であって、馬印は「輓馬隊」ではないか、といって帰ったそう

だ。受けとった妻は、勤め先へ電話してきた。当時、私は大飯郡内の京都府境に近い青葉山の中腹にある分教場で助教をしていた。電話はなかったので、山麓の本校から、小使いが報らせに来た。早々に授業をすませて、山を降りて本校の教員室へ行った。電話をうけた教頭も、他の教員も、「伏見のヨンサンや」というだけで兵科は知らなかった。受けとった妻もわからなかったのだから。私は急いで村へ帰った。「輓馬隊」つまり㊙印が、輜重輸卒であることがわかったのは、夕刻、父が仕事場から帰ってからだった。大工の父は役場のある本郷へ出ていて、私に召集がきたのを誰かに聞き、役場へ寄ったとみえて、村へ五人召集があったのも知っていた。五人とも輜重輸卒であった。

「とうとう来よったわ。馬のシルシは輸卒やでェ」

と父は土間の入口でいった。明治三十九年に金沢輜重隊に現役で入隊している父は、そこで輜重輸卒をつとめたので、㊙のハンコを見ただけでわかったのである。妻が兵事係のいった「輓馬隊」のことをいうと、

「輸卒には駄馬と輓馬があるねや。駄馬は馬の背中に荷物をつけて運ぶのやし、輓馬はけつに車をくくってひっぱる。輜重兵は剣もつれるし馬にも乗れるけど、輸卒は馬に乗れん。クツワをとって五里も十里もてくてく歩かんならん」

父がうす暗い土間に佇んだまま、心なし情ない顔をしたのは、明治三十九年の経験を思い出したのと、子供の私が、約四十年後に、同じ輸卒で召されるめぐりあわせが淋しかったのだと思う（ここで父が輸卒といったのはじつは明治の呼称であって、私の代の昭和十九年には、「特務兵」

と改称されていた。だが、令状には「特務兵」の記載はなく、ただ㊙のハンコがあっただけである。で私は、この時父のいった「輸卒」がなつかしくて、そう書く。よけいごとのようだが、馬を扱って馬に乗れず、駄馬あるいは輓馬で働く兵であってみれば、特務兵という語感はそぐわない。たとえば、特務といえば、前線でスパイ活動をする特務機関などという呼称があったし、特別任務を果す兵科といった意味が馬卒にふさわしい呼び名かどうか。とにかく、私には、特務兵より輜重輸卒の方がぴったりきて、その任務をよく表現していると思える)。

「輸卒はいくら働いても、星一つしかもらえん兵科でなァ。けど、わしら日露戦争のじぶんは、一カ月で戻れたさかい……お前もひょっとしたら一と月で戻れるかもしれんぞ」

と父はいい、眼つきをいくらかやわらげて土間を上ってきたが、それからふたりで、召集令状をいくら読んでも、一カ月で戻れるらしいと思われる服務期間の明細は記載されてなかった。また、「召集ヲ令セラル」との文面だが、誰にいったい召集されているのか主格のない文章であった。

二

昭和十九年の五月は終戦約一年三カ月前のことで、アメリカ海軍はサイパン島に迫っていた。東京も初空襲をうけていた。陸軍は、一月、インパール作戦をはじめ、海軍は、二月、敵にマーシャル上陸をゆるし、クェゼリン島、ルオット島の守備隊は全滅していた。その当時、電気業界の新聞記者だった私は、一月二十九日に横浜事件が起きたのも知っていたし、三月に古賀聯合艦隊司令長官が行方不明になったニュースもきいていた。市内の映画館、劇場は閉鎖され、軍がみ

な接収した。日夜の防火演習で、疎開もはじまった。妻が妊娠五カ月だったこともあって、東京に見切りをつけて、九歳の時に小僧に出たまま帰らなかった若狭の生家へ疎開したのが三月末で、召集は、帰省して約一カ月目のことであった。

もっとも、このまま分教場につとめていても、兵役はまぬがれるわけにゆくまいという予感はあった。だが、徴兵検査時は肺結核で丙種になり、第二国民兵役に編入されていたので、半分は助かるかもしれないという頼みもあり、またそれが空頼みにすぎなくて、結核でも快癒している者なら取られるという不安はあって、複雑な気持でいた矢先である。

入隊までに約四日あった。私は勤務先の青郷国民学校（駅二つ向うの村だ）の校長、教員仲間にあいさつにゆき、分教場の部落へもゆき、生徒の親たちから歓送をうけて、生家へ帰り、本郷村の召集兵四人と一しょに京都へ向った。入隊は五日の九時だったから、母の兄が京都の八条坊城という町で下駄屋をしていたので、そこで四日の夜は一泊させてもらうことにし、父と身重の妻と一しょに、舞鶴経由、山陰線に乗った。汽車の中は召集兵ばかりで、舞鶴、綾部、八木、亀岡とすぎる頃には、途中で乗りこんできた赤襷（あかたすき）組が満席になるほどいた。本郷から同時召集の者は、猿橋又平、渡辺浩太郎、小原伊作、堀口徹といい、最年長の私が二十六歳。ほかは二つか三つ下だった。みな丙種で第二国民兵役ばかりである。とりわけ堀口徹は猪首で首がまがっていたし、小原伊作は右手の拇指と人さし指がなかった。堀口は村の左官で、大工の父とは面識があった。小原は郵便配達夫である。猿橋は小学校教員、渡辺は満蒙開拓義勇軍の指導員で、内原訓練所から駆けつけたといっていた。これら四人の仲間にもそれぞれ家族が付いてきたが、結婚し

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

ていたのは私だけで、妊娠六ヵ月の疎開妻が見送りにきている事情は、どの家族もの同情を買って、注視の的になった。その夜、伯父の家に泊めてもらい、翌朝早目に八条から京都駅まで歩き、市電に乗って墨染町の四十三部隊営門前へ行った。ここは師団街道のまん中あたりで、当時は輜重隊兵舎は道路に面しており、からたちのまばらに生えた土塀をもち、営門は三十メートルほど入った地点にあった。五日の朝、この営門前の広場と、師団街道は、人でごったがえしていた。九時丁度に合図があって、私たちは営門を入った。うしろをふりむいたら、身重の妻が半泣きの顔をして旗を振っていた。チョビ髭を生やした父も、そのわきで、ペコリと一つ私にむけてお辞儀した。しかし、このふたりの姿は、すぐに人渦に呑まれた。

三

中部第四十三部隊は、旧輜重兵第五十三聯隊のことで、昔から十六師団「墨染輜重隊」といわれた、近畿に一つしかない輜重隊だった。三個中隊編成で、一、二中隊は輓馬、三中隊は自動車隊で、営門を入ると、衛兵所の真向いに膚のはげた葉のない赤松が三本植わっていて、そのわきに部隊本部、医務室、将校集会所があった。三百人近い召集兵の列に混じって営庭を入ってゆくと、右側に三棟の焦茶色の板張り兵舎が建っていた。どの窓も爆風よけの紙が、麻の葉模様に貼ってあった。召集兵は出身県別に、標示のある場所で整列させられた。背のひくいずんぐり肩の中尉が正面壇上に現れると、少尉、見習士官、下士官が両側一段下にならび、一人の士官が「敬礼」と叫んだ。私たちはばらばらの敬礼をした。壇上の中尉は、中隊長であった。私たち輓馬の

隊長らしかった。いつ、どのようにして、このような編成が準備されたか不明だが、中隊長のあいさつがすむとすぐ（この声は遠くなので何をいっているのかきこえなかった）、私たち福井、滋賀、三重、兵庫、京都、大阪組の前へ若い浅黒い顔の少尉がきて、名簿をよみあげた。私たちは、自分の名がよばれると「ハイ」と返事した。つまり、令状にある「当該部隊召集事務所ニ届出ヅベシ」の項目を、返事によって踏んだわけであった。点呼を終った少尉は直立不動の姿勢で、

「お前たちを只今より第二中隊第一小隊に編入する」

といった。すると、私たち仲間のところへ、これもずんぐり肩のふちなし眼鏡をかけた奥眼の軍曹がきて、

「お前たちを第一小隊第十一分隊に編入するッ」

といった。そして、その軍曹は、出身県もばらばらの二十名の召集兵をつれて、二階建て兵舎と向きあってはいるが、平屋建てのために、地めんにへばりついたようにみえるトタン屋根の兵舎へ導いた。

兵舎というよりは野原に急造した掘立小舎といってよかった。間口四間、奥行き七間ぐらいのバラックで、屋根はトタン一枚きり。仰ぐと釘穴がいっぱいあいており、板壁もまだヤニが出て、これもところどころに節穴があった。土間は車前草（おおばこ）や三つ葉が生え、両側に一間と少しはあるぐらいの腰高の床があって、中央にこれも、にわか造りの松板の卓が据付けられている。荒けずりの長椅子がそれに無雑作に立てかけてあった。卓の端をよくみると、タバコの焼け跡や、ナイフか何かの傷、落書きのようなものがあって、小舎は貧弱ながら、人の匂いがした（じつは三日前

に、ここに私たちと同じ境遇の輸卒が起居していて、インパールかどこか南方へ向って出発し、五日のその朝には、下関を出る船で海洋上にあったことなど知るよしもなかったのである)。

私たちは、腰高の床の前に、向きあってならんでいた。と、奥眼の軍曹は、二人の上等兵をつれてきた。一人は三十五、六のひょろりとした髭面で、一人は二十一、二の童顔だが、これもいやにひょろりと痩せている。ふたりとも皮鞘に入った長剣をつっており、長靴もはいている。奥眼の軍曹は、私たちをあらためて整列させると(整列といっても、思い思いの場所にいたままで)、いった。

「本日から藤田がお前らの命をあずかる。藤田の助手をつとめるのは平島上等兵と木田上等兵である。お前たちは、助手ならびに藤田の命にしたがい、輓馬及び駄馬の馭術其他規程の動作を習熟するため、輜重特務兵の勤務についたのであるゥ」

と本を読むような、しかも馴れた口調でいった。藤田は、私たちをひどく下目にみた感じでお前たちと呼び、「お前たちは直ちに私服をぬぎ、猿又だけになれ」と命じた。私たちは急いで裸になった。

「お前たちの後ろにある段は、今日からお前たちの内務生活の場である。壁の棚上にある手箱は各自の私物を入れるためのものであるが、奉公袋以外はすべて風呂敷に包んで、用意してきた油紙で荷造りせい。手箱のよこにたたんである襦袢、袴下、上衣袴、靴下、脚絆、下の釘につるしてある編上靴は、すべてお前たちのものである。直ちに着がえて、私物は包んで前面に置けッ」

私たちは、床にあがって、シャツ、股ひきをつけた上に軍服を着たが、上着もズボンもつぎだ

らけであり、破れていたり、袖丈がながくて手先が出なかったり、小さすぎて肩はばが窮屈だったりした。それで、がやがや声が起きて笑い声も出た。

「身丈のあわぬ者は隣の戦友のものと交換せい。なるべく身に合うものをつけろッ。いっておく。襦袢一枚、袴下一枚……すべて天皇陛下より賜りたるものである。粗末にしてはならんぞッ」

軍曹は天皇陛下という時に、靴の踵をあわせて、直立不動の姿勢をつくった。私たちは、ひそひそ声で、隣の者や、二、三人おいた者と、身丈のあう衣類をわけあった。だが、二十人の誰もにぴったりくる服はなかった。輜重輸卒は背が低くて、たとえば猪首の堀口徹のような不具者もいるのに、歩兵や輜重兵のための現役男子の寸法で縫製された衣類であった。着古されたつぎはぎであれば尚更である。丙種の体格に正常兵の衣類が合うはずもなかった。袖先の端を折った者や、短すぎて、手首の出たものなど様々だったが、一応の処理がつくと、私物の荷造りもすみ、軍曹は、私たちを整列させて、中隊事務所まではこばせた。そして兵舎へもどると、棚にあまっていた衣類を分配したあと、

「私物入れより奉公袋をとり出し、各自が持参した『輜重兵操典』を出せいッ」

と命じた。私たちは、箱のフタをあけ、しまったばかりの奉公袋から、『操典』をとり出して床前に整列した。『操典』は、召集令状の裏書きに書かれていたもので、必携私物の重要な書物二冊の一つ。私は若狭高浜の書店で買った。昭和十五年十二月四日附で、陸軍省検閲済と印刷してあった。発行所は東京市四谷区塩町一丁目二十一番地株式会社尚兵館となっており、定価は二十七銭。もう一冊の『馬事提要』は「陸普第五二九〇号、陸軍省副官河村董」の名義で、昭和六年

十二月十五日に改正されている。発行所は東京市日本橋区通三丁目一番地武揚堂書店で、定価三十銭である。いずれも手札型ぐらいの冊子である。藤田軍曹は、私たちが『操典』を手にして整列するのを見届けると、

「第六頁をあけいッ」

といった。私たちは六頁をあけた。

「第十一を見よッ」

とまたいった。私たちが、眼をその頁へむけると、

「第十一　輜重兵ノ本領ハ戦役ノ全期ニ亘リ確実迅速ニ作戦ノ要求ニ応ズル輸送及補給ヲ実施シ以テ軍ノ戦闘力ヲ維持増進シ其ノ戦捷ヲ完カラシムルニ在リ

輜重兵ハ堅忍持久ノ気力ヲ備ヘ全軍ノ犠牲タルベキ気魄ヲ堅持シ自ラ敵ノ妨害ヲ破摧シ有ユル地形及気象ヲ克服シ昼夜至大ノ行軍力ヲ発揮シ其ノ本領ヲ完ウセザルベカラズ

輜重兵ハ常ニ兵器ヲ尊重シ馬及車輛ヲ愛護シ輸送品ヲ保全スベシ

第十二　戦闘ニ於テハ百事簡単ニシテ且精練ナルモノ能ク成功ヲ期シ得ベシ典令ハ此ノ趣旨ニ基キ軍隊訓練上主要ナル原則、法則及制式ヲ示スモノニシテ之ガ運用ノ妙ハ一ニ其ノ人ニ存ス固ヨリ妄リニ典則ニ乖クベカラズ又之ニ拘泥シテ実効ヲ誤ルベカラズ宜シク工夫ヲ積ミ創意ニ勉メ以テ千差万別ノ状況ニ処シ之ヲ活用スベシ」

と読みあげた。軍曹はこれをかなり口早に読んだ。若狭の校長が教育勅語を読んだ時の調子に似ていた。私は軍曹の読みすすむところを眼で追っていたが、第十二の「固ヨリ妄リニ典則ニ乖

ク」の「乖ク」がきこえなかった（この字は今日でも読めないままになっているが、だいたいの意は、「典則にみだりに違反してはならない」というほどのことかと思う）。

軍曹は朗読し終ると、

「お前たちは余暇ある時はこの『操典』を読み、第十一の項目を暗記するようにせいッ」

といった。そしてちょっと語調をやわらげると、

「お前たちの中に草履つくりの出来る者があれば前へ出いッ」

といった。私は、『輜重兵操典』の朗読と、草履つくりとがすぐ結びつかなかったので、軍曹の顔をぽかんと見つめていた。すると藤田は眼鏡を人さし指でせり上げ、

「おらんか」

とどなった。二十人の応召兵は黙っていた。と、この時、右よこにいた渡辺浩太郎が手をあげた。私は、渡辺が内原訓練所にいたことや満蒙開拓義勇軍の指導員だった事情を山陰線車中できいていたので、彼ならば、草履つくりはできるだろうと思ったが、す早く手をあげたのにはびっくりした。と、渡辺は軍曹に気づかれぬように、私のよこ腹をつついた。手をあげろといっている。私は無意識に右手をあげた。じつは草履はつくれた。母がよく冬仕事に、私たち五人の子のために春夏の草履を編んでくれたので、そばで見ていたからつくれぬことはない、と思った。すると、また私の左わきにいる猿橋も手をあげた。

「前へ出い」

と軍曹は三人にいった。福井県出身三名は一歩前進した。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.